沼津市明治史料館通信

二〇一一年四月

通巻105号

■シリーズ　市民が語る戦争体験3
　弾丸の中をくぐりぬけて　勝地信正さんの体験談
■22年度新収資料の紹介
■22年度当館収蔵資料の使用

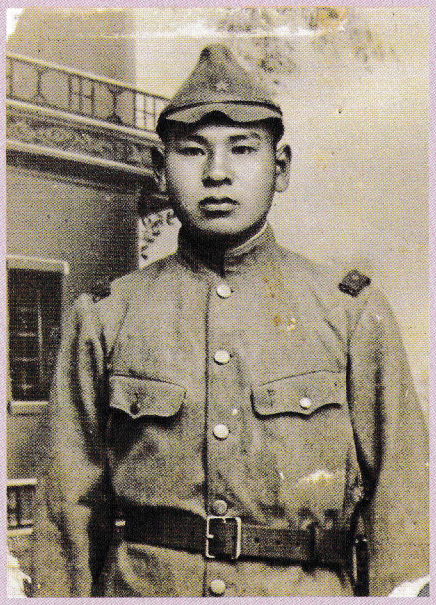
シリーズ　市民が語る戦争体験　3

弾丸の中をくぐりぬけて

勝地信正さんの体験談

勝地氏略歴

大正　八年七月	沼津市本字浅間町に生まれる
昭和一三年五月	徴兵検査、甲種合格
一四年一月	入営
四月	北支派遣軍独立混成第四旅団歩兵大隊配属（山西省・陽原）
一七年八月	満期除隊・帰還
一九年	日立製作所（東京都）勤務
二〇年	再召集・静岡歩兵連隊入営
二一年八月	終戦　捕虜となる
	復員



現役兵当時の勝地信正氏
山西省平定県岩会林にて中隊本部
（昭和14年4月）

静岡県出身者は一人もいない中隊へ

昭和一三年（一九三八）五月、徴兵検査は「甲種合格」であった。

翌年一月一〇日、静岡歩兵第三四連隊へ現役入営した。「猛訓練」の三ヶ月が過ぎると、山西省の「北支派遣軍独立混成第四旅団」の駐屯地・陽原に派遣された。

初年兵は分散され、私は歩兵大隊の配属となり、中隊本部へ行くと、二年・三年・四年の古兵、松山連隊や関東軍からの応援の兵隊など、まさに混成部隊であった。しかし、静岡県出身者は一人もいない。「静岡の兵隊はこんな奴か」となにかとケチをつけられ、松山からの二年兵に殴られた。

初年兵数名が、中隊の最前線警備分遣隊勤務となった。陣地はトーチカで兵隊は三〇名ほど。夜、歩哨に立つと、射撃音が絶えず聞こえ緊張した。

初めての作戦命令　弾丸の中を必死に前進

七月、帰隊命令で中隊本部に戻ると、すぐ作戦出動命令が出た。米一升、缶詰、乾パン、弾薬前盆六〇発、後盆六〇発、手榴弾一発、小銃、鉄帽、帯剣などずしりと重かった。

初めての作戦命令なので張切って行軍に加わった。山岳地帯を登ったり下りたりの毎日に、足に肉刺が出来たが痛みを耐えた。汗にまみれた上衣には塩が吹いた。

夕方、村に着いた。あたりに農民の姿はない。初年兵は分隊一同から集めた米を炊く。朝も昼もである。洗濯もある。何もせずに見ているだけの古年兵は、やり方が悪いと、「貴様、たるんでる」といきなり殴りかかる。敵地区深く進軍したが、敵は一向に姿を見せない。

部隊が山を下り、川を横切り農道に進んだ時、突然、山中から攻撃してきた。川では激しく水しぶきを上げた。

中隊長は攻撃命令を出した。弾丸の中を敵陣に迫る。初めての戦闘なので、もう無我夢中で小銃を撃つ。敵の弾丸が風を切ってシューシューと飛んでくる。すぐ目の前の土に刺さると土煙が舞い上がる。今まで訓練してきたとはいえ、もの凄い。怖い。やっぱり弾に当たって死ぬのか、ここで戦死かと思った。

隊長が叫んだ。「前の敵を攻撃ッ」生まれて初めて人殺しをするのかとふと思ったが、ひたすら前に向かって撃ちまくった。

下から衛生兵が担架を持ってきて。雨あられの弾丸の中、負傷兵を次々と運び出した。およそ三〇分過ぎた頃、急に敵の攻撃が止んだ。山の稜線に向かって退却して行くのが見えた。この戦闘で、小隊長以下、戦友の戦死、負傷があった。

用語解説

徴兵検査

当時、日本男子は二〇歳になると兵隊に適するか身体検査を受けた。市区町村長が毎年四月一六日より七月三一日迄の間に本籍地で実施し、甲種・乙種・丙種・丁種・戊種に区別された。

甲種→現役兵として翌年一月一〇日に入営する。

乙種→現役兵として入営はしないが、事変・戦争等が発生した際、充員が必要となると補充兵として入営が義務付けられる。

丙種→兵役に不適と認定された場合。

丁種→身体に障害があるため不適と認定された場合。

戊種→検査当日、疾病・負傷等により判定できないが、翌年の徴兵検査では甲種、乙種となる場合。

八路軍の大軍が猛攻「百団大戦」

戦闘が終わって本部へ戻ると、主力はすでに次の作戦に出動していた。

警備最前線の分遣隊数ヶ所から「敵襲、敵襲、交戦中、救援乞う」の連絡が入った。しかし、各分遣隊に連絡しようとしたが通信線は切断されていた。

共産八路軍、朱徳将軍の百個連隊二十数万の部隊が一斉に攻撃してきた。「百団大戦」である。

本部には五、六〇名しかおらず出撃出来ない。救援隊が石太線で行こうとしたが、線路はすでに破壊されていて行けない。各地で苦戦を強いられた。

太原からの友軍爆撃機二機が獅脳山頂を爆撃、ようやく八路軍は逃走した。

分遣隊の中には全滅や、撤退したものもあった。十数日後、警備地区周辺の掃討作戦を行ったが、負傷した戦友の多くは手榴弾ですでに自決していた。

除隊後二年、再び召集 漢口で負傷

昭和一七年八月、現役満期除隊で帰還し、東京都江東区日立製作所に勤務した。

しかし、二年足らずで召集令状がきて、静岡歩兵連隊に入隊したが、「日本新兵器超短波た号隊」に転属となり、漢口へ行かされた。

漢口陸軍飛行場横が兵舎、田圃の中に陣地。連日、空爆を受けた。飛行場には飛行機は一機もない。

昭和一九年一二月八日、武漢大空襲があった。有線連絡が不通となったので磯村伍長、長尾一等兵らと電線の補修を命じられた。機材を取りに行く途中、B29が後方から爆弾を落としながら追ってきた。

「伏せろッ」大声で叫び、自分も田圃のあぜ渕に耳と目を両手で押さえて伏せた。と同時に爆弾の炸裂音。猛烈に土が飛び散った。その時、針が突き刺さったような激痛が走った。もう駄目だ、ここで俺は死ぬのかと思った瞬間、先祖代々の墓地が浮かんだ。ほんの二、三秒のことだ。それがスーッと消えたら爆音も遠くなっていた。周囲はもうもうたる土煙で何も見えない。「ウーン」とうめく声のあたりをよく見ると磯村伍長が田圃の真ん中で立ち膝をしている。近づくと巻脚絆が破れ、肉が飛び出している。「これしきの傷で…しっかりしろ」と言いおいて長尾一等兵をさがした。陣地まで五メートルあたりで上向きに倒れている。片腕は皮だけ、意識がない。ビンタや鉄拳でぶん殴ると、かすかに声を出した。

「担架持って来い、早くしろ」と医務室へ運んだ。後からついてゆこうとすると大腿部が変だ。袴下を脱ぐと血で真っ赤だ。爆弾の破片が二ヶ所刺さっていた。

「ヨーチン塗ってくれれば良いです」

「馬鹿、一緒に入院しろ」と言われた。

磯村伍長はその夜、戦死した。結婚して二〜三ヶ月で召集。その女房から手紙が来たのだが作戦に出たので読まずに死んでしまった。長尾一等兵は数日後、内地護送となった。

毎日の空爆で負傷兵が次々と運ばれてきた。元気な兵は看護婦の手伝いをした。重傷者が大きな息をし、口を開けると、もう助からない。末期の水を飲ませると間もなく息を引き取った。何人も同じような行動をとった。

捕虜となって 練兵場作りの土方

私は一ヶ月ほどで退院、小隊に戻った。「日本新兵器超短波た号隊」といういかめしい名前だが、電波標定機から超短波を発信し、飛行機に当り戻ってくる電波を測定して、高度、距離、方向を高射砲隊などに伝えるのが任務だが、直距離四五キロ以上は発信できない。映像を上げたり下げたり回してみたりする。飛行機の方が速いから捕捉しても見えなくなってしまう。全く使いものにならないロクな新兵器ではなかった。

八月一五日、集合命令が出て、ラジオで玉音放送を聞いたが、日本の降伏など信じられなかった。捕虜になって揚子江下流の咢城に移動、練兵場の工事をやらされた。一年近くひどい土方作業で、食うものがなく、みんなで靴下持って村に米を貰いに歩いた。

二一年八月、ようやく鹿児島港へ上陸した。

独立混成旅団

通常、独立歩兵大隊五個編成の他、旅団砲兵隊、工兵隊、通信隊等で編成され、機敏な行動力を持ち、総兵力は一万名に満たない。主に北支方面に展開、駐屯した。入隊の初年兵は年次ごと全国の歩兵連隊から徴集されるため、古年兵（一等兵、上等兵、兵長）に同県人がいないことが多く、初年兵を庇ってくれる古年兵がいないので、私的制裁が多く、自殺者や演習中の事故が多発したといわれる。

北支派遣軍

北京を中心とした支那北部に派遣された日本軍の総称。支那中部の中支派遣軍、南部の南支派遣軍とあわせた三派遣軍のまとめ役が支那総軍と称した。

百団大戦

昭和一五年七月、北支戦線全域で共産軍が一斉に日本軍の守備地域へ攻勢をかけてきた。手薄な日本軍守備隊は各地で犠牲者が続出した。満期除隊の兵を乗せた帰還列車が襲われ、警備程度の火器しか無かったため、満期兵は最後は石を投げ、全滅した事件もあった。

八路軍（はちろぐん・パーロとも）

毛沢東が組織、指揮した共産軍。北支方面では蒋介石の国民党軍の展開は少なく、山西省では専ら八路軍との交戦が独立混成旅団の戦闘であった。作戦、討伐の地域が山岳地帯のため、日本軍は行軍に苦労した。

平成22年度新収資料の紹介

昨年度、明治史料館に仲間入りした資料です。

寄贈	杉本康行様	勲章授与証・支那事変従軍記章之証・勲章授与証・勲記（仮記）
	神谷昌則様	神谷景昌関係資料
	石井成子様	静浦保養館・静浦ホテル絵葉書
	飯田慎一様	飯田咸三郎関係資料
	水野秀和様	戦時資料（従軍記章など）
購入	絵葉書（16件） 「県社丸子神社郷社浅間神社」「伊豆 三津海浜 長岡館と海水浴場」「（三津名勝）海水浴場」「伊豆 三津海浜 松濤館ト海水浴場」「伊豆内浦三津海水浴旅館 松濤館」「（沼津名勝）沼津千本浜ノ公園（其二）」「（沼津牛臥）三島館玄関」「新版 三津勝景ゑはがき」「長浜網代より見たる三津全景」「二又より淡島を望む」「三津久伏海岸より見たる富岳」「三津海岸網干場」「三津海岸二又の景」「伊豆三津港」「三津来迎寺の老桜」「伊豆三津町長岡館前通り」	

購入	古写真（2件） 「静浦の富士（手札形写真）」「趣味の静浦」 沼津兵学校関係（関係者等の著書・書簡など18件） 大鳥圭介『野戦要務 全』（沼津版）・平井参漢詩文草稿・『伊吉利文典全』手塚律蔵西周助校閲・『化学入門 初篇』桂川甫策序・竹原平次郎著・「大築尚志書簡」など 江原素六関係（3件） 『麻布中学校校友会雑誌』『平和論集』「私立麻布中学校規則」 沼津藩関係（3件） 『小さき音』『新選 明治詩文』『黒船』六月号 その他沼津の歴史関係（6件） 『杜蔭 第一号』『中庸繹解 一・二』『余の日本農道観』『沼津より見る富士山（裏面時間割表）』『小学修身編 四』「葛山氏元書状」

平成22年度当館収蔵資料の利用

明治史料館の資料がいろいろなところで活躍しました。

☆展示使用

5月	沼津御用邸記念公園　端午の節句展示　「祝着」（三津石井家資料）
5月	加藤学園高校化学部「第2回 沼津市の水環境展」　絵はがき「黒瀬橋の富士」など
9月～10月	佐野美術館「没後120年記念 仕掛けの絵師 鬼才・河鍋暁斎」『通俗伊蘇普物語』など
10月～11月	沼津市立図書館「読書週間企画展」「茶壷」「茶箱」など
12月～1月	静岡市美術館「家康と慶喜―徳川家と静岡」展　「沼津黌」扁額
3月～5月	富士市立博物館「富士山縁起の世界」　愛鷹山縁記（原渡辺家文書）
3月～4月	沼津信用金庫　代戯館まつり「榊俶」　榊俶著書など

☆刊行物掲載

8月	静岡新聞社出版部　樋口雄彦著『静岡学問所』「静岡学校」蔵書印など
9月	㈱世界文化社『歴史スペシャル』10月号　写真「水野忠敬」
1月	㈱ポプラ社　ポプラディア情報館『郷土の人物』　写真「江原素六」
3月	沼津史談会『沼津史談』62号　「御浜海水冷温浴場保養館開業広告」
3月	碧南市藤井達吉現代美術館『碧南市藤井達吉現代美術館 年報・紀要』豆田誠路「大浜陣屋の歴史的変遷―建設の経緯及び廃藩置県後の変遷」「大浜陣屋ノ図面」（旧沼津藩士杉浦家資料）
3月	社団法人静岡県出版文化会『わたしたちの静岡県』　写真「江原素六」
3月	横須賀開国史研究会『開国史研究』「谷田掘鴻叙勲記」（谷田掘鴻関係文書）
3月	沼津史談会『西周と世界、そして沼津』「沼津略画図」（旧幕臣桑山家文書）など

☆テレビ等映像・その他

4月	㈱東京海上日動HRA　社内研究用資料　写真「佐々木慎思郎」「永井久太郎」「津田東」
5月	テレビ東京「出没！アド街ック天国」　絵はがき「我入道海岸」
6月	日本生命保険相互会社沼津支社　講演会　写真「沼津駅前」「大手町」「川廓」
8月	日本放送協会　「ファミリーヒストリー」　絵はがき「茶の静岡県」など
3月	株式会社日本経済広告社　モデルルーム内掲示「沼津城周辺図」
4月～	南駿農業協同組合「ぬまっちゃ」ボトル缶　写真「江原素六」

沼津市明治史料館通信
第105号
平成23年4月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印刷
みどり美術印刷株式会社

表紙の解説

表紙の作品は、笠松紫浪作「伊豆淡島」（昭和28年作）です。紫浪は明治31年（1898）東京・浅草生まれ。本名紫郎。14歳のとき日本画家鏑木清方に入門し日本画を師事しました。新版画の制作は、大正8年に渡邊版画店より版行した「晴嵐」が初めです。以後、東京をはじめ各地の風景画や、生け花・熊など伝統文化を描いた作品を発表しました。

沼津市域を描いた作品としては、本作品の他に「伊豆長浜」（昭和12年作）が知られています。

お詫びと訂正

通信104号2ページ4段目末尾
「永井久雄様」
↓
「永井久隆様」
大変失礼致しました。お詫びして訂正させていただきます。

人事異動

3月31日付で館長遠藤裕孝が退職。
4月1日付で館長石川治夫、主事川口勝久が着任しました。
4月2日付で事務補助員石田ゆかりが市文化財センターへ異動、後任に岡田三千代が着任しました。
今後ともよろしくお願いします。